

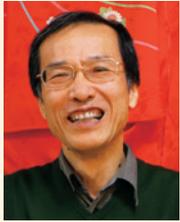
なかの発!

FROM  
NAKANO

03

着物は実用品  
着る人がいるからこそその伝統工芸  
東京手描友禅職人 熊澤吉治さん

1951年生。中野区出身、南台在住。東京都工芸染色協同組合理事。中野区伝統工芸保存会前会長。自他ともに認めるアナログ派。携帯電話やパソコンは今後も所持するつもりはない。



彩り豊かな模様が目を引く。表紙の写真は、熊澤さんが七五三用に作成した手描友禅の着物だ。真っ白な生地が、色鮮やかな1枚の着物になるまでには、実に多くの工程がある。「常に染料で絵を描いてると思われることが多いけど、それ以外に地味な作業がたくさんあるんだよ」と着物を見せながら、よどみなく説明してくれる。毎年6月に開催される中野区伝統工芸展で長年、見学者を相手にしているからだろうか、とても説明が上手だ。

中野生まれの中野育ち。父親の

跡を継ぎ職人となったが、幼なじみたちには「お前が職人になるとは」と驚かれる。高校で生徒会の役員になるなど、人の中心にいることが多く、孤高の職人というイメージではないからだ。だが、現在は、ただ技を提供するだけでは立ち行かない。自身で在庫を持ち、作品を見てもらう機会を作る必要が生じている。デパートの展示会などでは、実演しながら作品の説明、商談と一人で何役もこなす。

伝統工芸の将来を憂える人もいるが、「それなら普段から使ってください。必要とする人がいないのなら、それまで。自分は誰かに着てもらうために作っている」と、熊澤さんの

言葉は明快だ。弟子を置く予定はないが、2年ほど前から、友禅を勉強したい一心で来日した韓国女性に技を教えている。何年もかけて日本語を習得し、日本の服飾系の短期大学で学んだ上で、教えを請いに来た彼女とは、今では家族ぐるみの付き合い。日本の伝統工芸は、世界へと広がっている。



なかの発! →  
中野で活躍する文化人を幅広く紹介します

伝統工芸にチャレンジ 自分色に塗ってみよう

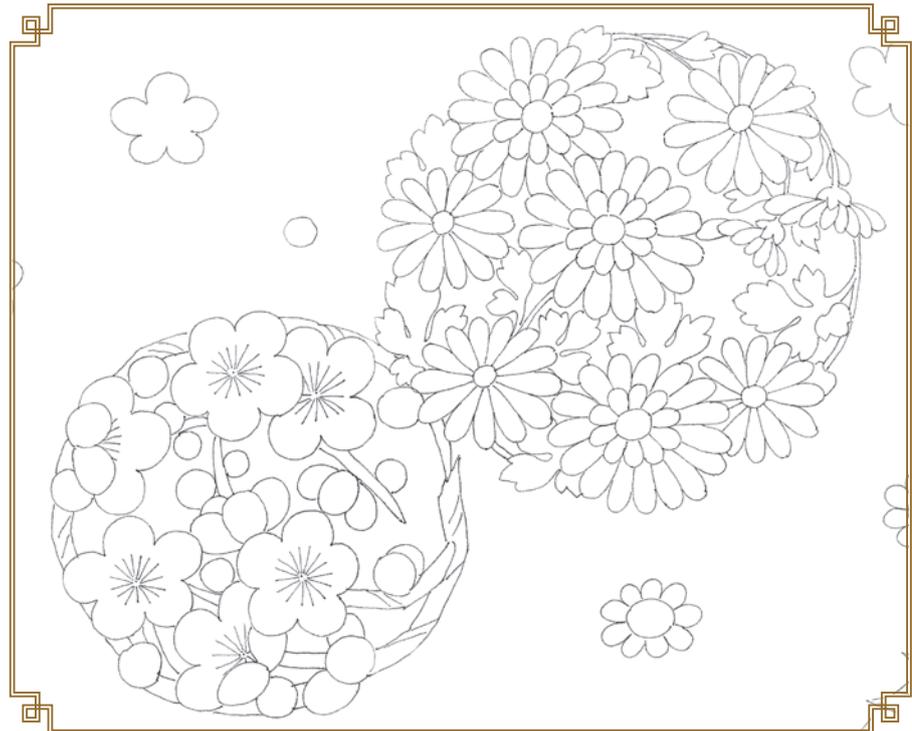
下の図は表紙の着物の下絵です。色鉛筆や絵の具などで好きな色に塗ってみませんか。あなただけのオリジナル作品として、お楽しみください。



中野区伝統工芸保存会には、手描友禅の他に、和人形や佐賀錦、陶芸など16種の職人が26人在籍。その作品の一部は、中野区のふるさと納税の返礼品にも採用されています。  
 ☆中野区の伝統工芸職人について詳しくは、[区HP](#)をご覧ください



こちらからアクセス  
できます



次号予告

いろんな個性が育つ場所



なかの区報二次元コード

区内各家庭の郵便受けなどに配布しています  
情報活用後は、資源として古紙の集団回収へ